

本多静六通信

第22号

発行
本多静六博士会
を顕彰する

六甲山系のはげ山緑化と本多静六

お茶の水女子大学名誉教授 遠山 益



(通信二十一号に引き続き)

五 本多による六甲山系の緑化の設計と施行

神戸は明治二十二年に市制が施行された。当時の人口は十三万四千余人に急増していた。すでに慶応三年に開港して、港町として発展を続けた。外国人の居留地が設けられ、多くの外国人が居住して、神戸の発展に大きな影響を与えた。大都市の共通の課題として公衆衛生の問題があり、神戸も例外でなかった。人口の激増に公共設備が追いつけない状態であった。明治二十六年(一八九三)市議会が公営水道の敷設が可決されて、

同三十三年には生田川上流に布引貯水池が完成した。

しかし、この貯水池の水源域ははげ山状態で、大雨のたび毎に泥流が貯水池に流れ込んで、貯水池としての機能を果たさない有様であった。そこで水源林を造成するための砂防植林が急務となった。このように、坪野市長が就任(一九〇一年)する以前から神戸市では水道水源林の造成を始める必要性が出揃っていた。

明治三十五年(一九〇二)に神戸市は愛媛県から造林経験者十一人を採用し、六甲山系のはげ山緑化にあたらせることにした。坪野市長は同三十五年十一月十三日彼等作業員を激励して造林作業が始まっ

た。この年を六甲山系緑化の元年とする。二〇〇三年はこの緑化開始以来百年にあたるので、神戸市ではいろいろな行事が催された。坪野市長は明治三十五年暮頃から同三十六年にかけて、本多静六と接触を重ね、正式には同三十六年六月六甲山の砂防造林の計画・設計を依頼した。

これに先立って、前記したように本多は明治三十二年(一八九九)に荒廃した布引貯水池の水源域を視察している。この視察を通して、水源涵養林の造成だけでなく、土砂災害から市街地を守るために、早急に砂防工事と造林とを行うべきであると、神戸市に報告している。この報告に基づいて、神戸市



布引の滝とその周辺。明治32年この地を視察した本多は「これは地獄谷だ!」と絶叫したという。

は兵庫県に砂防工事を申請し、同三十五年からの九年間にわたり、はげ山復旧を生田川上流の中一里山で第一期砂防造林計画として実施することになった。

この計画の実施にあたり、本多は京都府立農林学校教諭斉藤勝蔵を嘱託技師として推薦し、明治三十六年度から同三十九年度までに約六百ヘクタールを目標に植林が開始された。この植林の特徴は植栽樹種が二十種類も含まれ、クロマツを主林木としながらクスノキ(樟脳採取)やハゼノキ(木ろう採取)など有用な樹木、クリ・クヌギ・コナラなどの落葉広葉樹などを混植したことである。

後述するように、これは本多の造林に際する哲学であって、常緑樹と落葉樹、針葉樹と広葉樹の配合、その上四季折々の色彩などを考慮した植林である。さらに表六甲の風光明媚な神戸をはじめ諸都市の背山としての植林であるから、当然のことながら、風致林をも考慮せざるを得ない。このように、本多の造林は単に一次的な防災機能だけでなく、風景美から森林経営までの各種の機能を含める方法であった。

植林は塩ヶ原（修法ヶ原）から始まり、再度山・布引山へと広げられた。六甲山系のはげ山は当時ササ原の部分と砂地の露出した部分があった。ササ原には一般の植林法が適用されたが、砂地には砂防を含めた植林、すなわち積苗工と呼ばれる工法が実施された。この方法は明治時代から第二次世界大戦前まで、わが国では広く採用されたが、近年ではほとんど応用されなくなった。今日では以前の工法に代わって法枠工・アンカー工など、すなわちコンクリート枠、鋼枠、木枠などの二次製品で山腹を固定して緑化する工法が採用されるようになった。

本多らが応用した積苗工には山腹の傾斜や土状などによって、並芝工、三枚積苗工、四枚積苗工、五枚積苗工、段積苗工などいろいろな工法が工夫された。いずれも山腹に階段を造り、敷芝の上に土を敷きならし、天芝を置いてた



本多の計画で植栽したアカマツ林（再度山公園）

く、切芝を用いて階段状に仕上げた工法である。すなわち、切芝によって土砂を固定し、植栽木にとって良好な環境を造るとともに、水平階段によって表面を流下する水を分散させ、斜面の浸食を防止するのに効果的である。植栽木はヒノキ・スギ・クロマツ・アカマツ・ヤシヤブシ・カシ・フウクスなどであった。（写真V参照）

本多による第一期造林計画では明治三十五年度から同四十三年度の九年間に、六百五十町歩（ヘクタール）の造林を成就した。最初に始めた修法ヶ原は再度山の麓にあり、広さ約五ヘクタール、そのうち約二ヘクタールが当時本多らが植栽したアカマツが主林木である。これらのアカマツは現存している。目通り直径七十から八十七センチメートル、樹高十五から二十メートル、樹齢百十から百二十年の大樹に成長して、約五百本が樹勢も良好である。

この地のはげ山復旧工事はわが国の治山工事の発祥地といわれる所である（現神戸市北区山田町再度山公園）。後述するように、今日この地は美しい樹皮のアカマツ林に囲まれ、修法ヶ池を中心とし



再度山と修法ヶ池。はげ山であった再度山は全山緑におおわれている。

た静かで優雅な公園で、神戸市民の憩いの場所である。

六 神戸背山の緑化の今日的意義

六甲山系の緑化に着手してから百余年、今日ではほぼ全山が緑におおわれた美しい山並みである。この緑化事業の成功した原因として、神戸市公園砂防部長田中充氏は次の三点を挙げている。

(一) 機を得たこと。当時神戸市は、人口が増加して、造林事業費を支出できるほどの都市力を貯えていた。その背景には水害や伝染病などの被害を除く必要にせまられていた。

(二) 人を得たこと。当時の神戸市長坪野平太郎は親交のあった本多静六に緑化事業の調査計画を依

頼した。本多は造林、造園、都市計画の分野などで、東京帝大教授として積極的に活動していた。

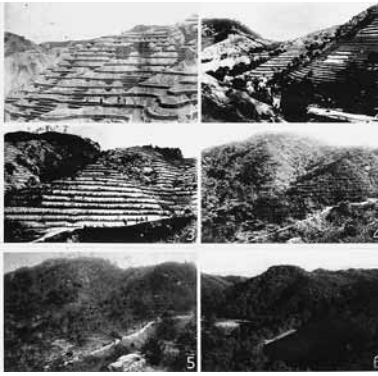
(三) 計を得たこと。本多の計画は神戸背山の砂防造林だけにとどまらず、将来の神戸市の都市林としての機能を考慮して、風致林や健康保養林にもなるように、また森林経営の安定化にも配慮して、二十数種類もの樹林を混植した。本多のこの都市林の構想は、東京の明治神宮の森の造成時と酷似している。神宮の森はいまや世界的にみてもすぐれた都市林としてその機能を十分に発揮している。

阪神地方では、昭和十三年（一九三八）七月三日～五日の豪雨による大水害で七三一人の犠牲者を出し、このうち神戸市の死者は六一六人であった。同年十月二十七日、本多は神戸市勸業館（商業会議所）において「治水の根本策と神戸市背山に就いて」と題して講演を行っている。この講演の冒頭において、「…実はこの大水害は、天災でも何でもなく、まったく人災なのであります。我々が当然成しておくべき事を怠ったたり、または成してはならないことを成したためにできたものであります。

：」この分野の指導者として本多自身の反省を述べた後、一般市民の注意を喚起した。

さらに続けて、「明治三十五年頃から応急手段として赤禿山に最も造林し易い黒松林を仕立て、次いでその間に闊葉樹を仕立て、漸次第一期の闊葉樹に導く方針であったのに、一度黒松林成立するや忽ち安心して、その一部には早くも乱伐行われ、一部には開墾が許可され、その他六甲山の大部分には連年山火事が入って焼野となり、加うるに至る処に不完全なる観光道路等が開削されて、みんしゅうの林内を踏み荒らすことが多くなったため、ついに今回の惨害を来したものであります」と述べている。

このように、当時本多が危惧した乱伐がすでに始まっていた。本



V本多静六が林況を写真として残すよう指示したもの

多は講演の中で「せっかく造林しても再び濫伐せらるるのを予防するため、この実況を写真で残そうと写しておいた写真が今尚神戸市の何処かにあるはずであります」というので、神戸市役所ではこれらの写真を探し出したものが写真Vである。

神戸市では昭和十三年の阪神大水害を機会に砂防造林に本格的に取り組んだ。

この頃の事業が第二期植林期といわれる。その後、四十年代になると、マツクイムシの猛威のため消滅した松林の復旧を推進する森林改造事業が始まった。当時は全国的に経済林造成が主流の時代であり、今日見られる成長したスギ林やヒノキ林の多くはこの時期に植栽されたものである。これが第三期の植林期といわれる。

昭和四十二年（一九六七）七月七日、九日の大豪雨であったが、この時の人的被害は阪神大水害時の七分の一、家屋被害は四分の一にとどまった。この結果はこれまで継続してきた砂防造林事業の成果の賜と考えられる。

平成七年の阪神淡路大震災では、地震とその後の降雨によって、

六甲山系の山腹の数百箇所が崩壊が発生した。これは六甲山系の地盤のもろさに起因するものである。この対策として、兵庫県は国と連携して六甲山系の治水砂防事業すなわち「六甲山系グリーンベルト構想」に取り組むことになった。

当時の兵庫県知事原俊民氏は「この事業は宝塚市から神戸市までの約三十キロメートルの山麓に豊かで安全な緩衝緑化を造成し、市街地を大グリーンベルトで取り巻くという構想である。これによって、土砂災害に対する安全性を高め、自然環境の保全・育成・快適な都市空間の創出・無秩序な市街地の防止などに大きく貢献するだろうと期待されている」と述べている。

明治時代本多静六は熟慮と将来の展望によって、今日の緑豊かな六甲山系を導いたように、これらの百年の神戸背山と神戸市民との相互関係をより実りあるものにするため、長期的視点に立つて対処しなければならぬ。

前述した本多講演では、思慮の欠けた六甲山開発に対して厳しく批判しているが、他方、本多は講演の中で次のように述べている。

「：今回の水害に対して、神戸背山の山林を開いて自動車道路や遊歩道やケーブルを造ったり、別荘地や遊覧地を設けたりしたのが悪いのだから、これらを一切止めさすのが安全な治水策だという人もありますが、それは文化の後退であって、今日の世に言うべき語ではありません。神戸背山一帯の山岳のごときは、その位置・景勝の点からみて、天然已に市の森林公園として利用さるべき運命を有するものであります。ただ、その利用法がよく天然の地勢・地質・傾斜・林況などに応じて安全なる方法をとるべきであったのに、それが間違っていたためである。されば道路やケーブルを作ったのが悪いのではなく、造り方が悪かった。」

このように本多の砂防造林に対する考えは、目前の防災対策だけにとどまらず、遠い将来をも視野に入れて柔軟に対応するのが常であった。その基盤は欧米先進諸国の文化の洗礼を受けて帰国した本多の人生哲学に基づいている。すなわち、全ての人間は平和で合理的かつ豊かな文化生活を受けるべきであるとする人道的思想であった。

表六甲の諸都市、なかでも神戸は人々が風景美として希望する山と海の二つの要素を備えた街である。六甲山は神戸のシンボルであり、神戸がなくては六甲山の存在感もない。神戸市産業振興局主幹中西理香子氏によると、「六甲山系は神戸にとってかけがえのない財産である。神戸を訪れる人々はリピーターが大半で、神戸を第二の故郷のように何度も訪れ、六甲山から癒しと活力とを得ている」という。筆者もまたその一人である。

今日、六甲山系の砂防造林は進行して全山緑におおわれ、安定化したように見えるが、課題がないわけではない。これまでの百年を振り返り、これからの百年を視野に入れて、市民・行政・専門家が一体となって、神戸は六甲山と共に生き続けなければならない。「天災は忘れた頃にやってくる（寺田寅彦）」を肝に銘じながら。

七 おわりに

最後に、この小論は高橋敬三氏を書くはずであった。以前「六甲山の緑化と本多静六」に就いて執筆してほしいとお願いし、高橋さんも快諾してくださっていた。と

ころが昨年（二〇二二）突然ともいえるほどの病気で世を去った。残念至極、あまりの大きなショックでしばし呆然とした。

高橋さんは大学で林学を学び、神戸市役所に勤めて一途に六甲山の山林と取り組み、神戸市建設局公園砂防部の中でも「六甲山の生き字引」といわれた人である。在職中は神戸市立の各地の植物園や公園の園長を歴任し、定年退職後も神戸市から乞われて、一研究員として六甲山の森林に取り組んでいた。

したがって、高橋さんは本多静六を尊敬し、本多の人間性や業績について精通していた。彼が上京した折、かねて希望していた本多静六の生誕地を埼玉の片田舎まで案内したことがある。高橋さんと筆者との交際は三年余りに過ぎないが、その間の交際の内容は濃密で、数十通の手紙を保存している。はがきや電話などで済ますことなく、常にパソコンで長文の手紙であった。彼の誠実な人間性あふれる内容であった。

六甲山の緑化と森林について、高橋さんのように多量の知識と豊富な体験を持ち合わせない筆者で

あるから、この小論は不足分が多
く、満足のいかない内容に終わっ
たかもしれない。高橋さんどうぞ
お許しください。生前高橋さんは
活動過ぎるほど活動した身であり

ますから、どうぞゆつくりお休
みください。つたない小論を高橋敬
三氏のご霊前に捧げます。
平成二十四年十一月 遠山 益

【参考文献】

1. 本多静六我国地力の衰弱と赤松、東洋学芸雑誌十七卷明治三十三年（一九〇〇）東洋学芸社
2. 仲彦三郎編、西攝大観上巻、明治四十四年（一九一〇）中外書房
3. 本多静六、治水の根本策と神戸背山に就て（講演録）昭和十四年（一九三九）神戸市山地課
4. 牧野富太郎、東京への初旅、牧野富太郎選集一、昭和四十五年（一九七〇）、東京美術
5. 松の緑を守る会編、災害から神戸市民を守りつつける六甲山の松、昭和六十三年（一九八八）、松の緑を守る会
6. 米井洋・菅原義明、六甲山系の治水事業の変遷、第二十九回治山研究発表会論文集、平成三年（一九九一）
7. 田村浩一・竹下洋一、六甲山系における治山ダム問詰と緑化工、第三十二回治山研究会発表会論文集、平成五年（一九九三）
8. 兵庫県治山林道協会編、六甲山災害史、平成十年（一九九八）
9. 神戸市編、六甲山緑化百周年記念
10. 高橋敬三、よみがえった六甲山地の緑、都市政策一三二号、平成二十年（二〇〇八）、神戸都市問題研究所
11. 高橋敬三、神戸市における森林ポランテア活動、森林技術八一六号、平成二十二年（二〇一〇）、日本森林技術協会
12. 高橋敬三、六甲山緑化と本多静六博士、フォーラム「六甲山の緑について考える」平成二十二年（二〇一〇）国交省近畿整備局
13. 遠山益、六甲山はげ山復旧「森林土木今昔物語」平成二十一年（二〇〇九）森林土木物語編集委員会
14. 田中充・六甲山森林整備戦略の展開に向けて、都市政策一四二号、平成二十二年（二〇一〇）、神戸都市問題研究所
15. 中西理香子、六甲山の観光―観光資源という視点から六甲山を考える、都市政策一四二号、平成二十二年（二〇一〇）神戸都市問題研究所

第六回本多静六賞 受賞者の紹介

埼玉県農林部森づくり課

主査 石橋弘樹

一 第六回本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を、平成十九年度から表彰しています。第六回本多静六賞については、計十一件の推薦による応募があり、選考委員会による選考を経て、東京大学名誉教授の太田猛彦（おたまたけひこ）氏が受賞されましたので御紹介します。

二 太田猛彦氏の功績



太田猛彦 氏

○経歴と功績

太田猛彦氏は、東京農工大学や東京大学、東京農業大学で約四十

年にわたり、森林と水との関係を中心に森林水文学や治山・砂防学、森林環境学などの研究及び教育に携わるとともに、砂防学会会長、日本森林学会会長、日本緑化工学会会長、森林・自然環境技術教育会会長、F S C ジャパン議長※など多くの要職を務め、多大な功績をあげています。

※F S C ジャパン

F S C (Forest Stewardship Council 森林管理協議会)とは、国際的な森林管理の認証を行う協議会で、F S C ジャパンは、F S C 国際本部から承認された団体。

○地域活動

埼玉県での活動として、埼玉県緑の骨格づくり計画策定懇話会座長や、秩父市行政経営アドバイザー、さいたま・水とみどりのアカデミー校長などを務めるほか、N P O 団体と連携して、さいたま市など都市部の住民を対象に市民講座を開き、科学的な知見に基づき森林の役割や保全の重要性を一般の人にもわかりやすく説明するなど、地域との交流を大切にしながら、普及啓発に取り組みられています。

○著書・編著の紹介

太田猛彦氏は、森林と水との関係を中心に、専門書から一般書まで多数の執筆や編著がありますので、その一部をご紹介します。

- ・森林飽和 (NHKブックス)
- ・森と水と土の本 (ポプラ社)
- ・溪流生態砂防学 (東京大学出版会)
- ・森林の百科事典 (丸善)
- ・水の事典 (朝倉書店)



著書 森林飽和

○社会的貢献

「東日本大震災に係わる海岸防災林の再生に関する検討会」の座長を務め、海岸林再生についての提案を行っているほか、近年の台風災害で注目された「深層崩壊」について研究や解説を行っています。

三 本多静六賞表彰式

表彰式は、平成二十五年四月

二十一日に久喜市菖蒲総合支所で開催された「本多静六記念館オープンセレモニー」の中で行い、上田清司埼玉県知事から太田猛彦氏に表彰状と副賞が贈られました。



表彰式の様子

四 終わりに

県では本多静六賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいます。引き続き、皆様の御理解・御支援をお願いいたします。

宮沢賢治の内なる

本多静六博士

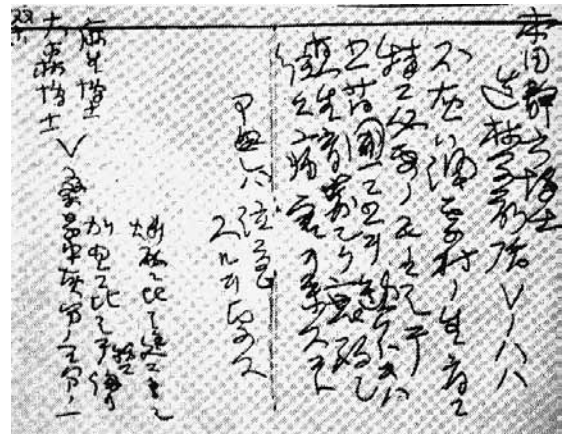
吉見正信

私にとって、《本多静六博士と賢治とのかかわり》を論証することは、積年の課題でありました。

それは、昭和五十年代に入ってから刊行された、筑摩書房刊「校本宮澤賢治全集」第十二卷(上)には、「孔雀印手帳」と呼ばれたその中に、次のような賢治手書きのメモ図版が掲載されているのに気づき、欣喜雀躍してからということになります。その図版は、

「本田静六博士／造林学前論Vノ八八／石灰ハ闊葉樹ノ生育ニ特ニ必要ノモノニシテ／之苗圃ニ之ヲ欠クトキハ／其生育著シク衰弱シ／往往病害ヲ来スコト／アレバ注意／スルヲ要ス／燐酸ニ比シ遥ニ多シ／加里ニ比シテ稀偏リ／麻生博士・大森博士——桑葉中灰分ノ三分ノ桑」

であります。冒頭の「本田」は言うまでもなく誤記で、やはり賢治は本多博士を熟知し、本多学説を重んじその学恩に親灸していた証拠と確認できます。



宮沢賢治「孔雀印手帳」の本多静六の著書に関するメモ
〔校本 宮澤賢治全集題12卷(上)〕より

ところが、こうした本多博士と賢治の接点の糸口を得た段階で、さらに、もっと以前から気にかかっていたことがありました。

それは、賢治その人の生活空間における行動その実景や、作品(詩)の中に、しばしば造園学の泰斗であり、わが国の造園学創始者でもある、碩学本多静六博士が出没しているかのごとき錯覚が拭いきれなくなっていたことでした。

しかも、賢治自身も本多博士を意識し、念頭にしていたことだったのではないかと、私にはどうしてもそう思われてならない確信だか妄想だか知れない自分だったことを告白せざるを得ません。

現にそうした作品があるからであります。

花壇工作

おれは設計図など持って行かなかった。それは書くのが面倒なのと、／もひとつは現場ですぐ工作をする誰かの式を気取ったのと、／さう二つつが／おれを仕事着のまま支那の將軍のやうに／その病院の二つの棟にはさまれた緑いろした中庭に／テープを持って立たせたのだ。……以下略：

作中では「誰かの式」とあって、賢治はすでに「花壇」作りをするに当り、花壇作りでは著名な誰かを念頭においているわけです。

私は即座にあの人だとわかり興奮してしまいました。皆さんはいかがでありますしょう。

次は「文語詩稿 五十篇」中の著者

造園学のテキストに、おれが像を百あまり、／著者の原図と銘うちて、かかげしことも夢なれやと、／青き夕陽の寒天や、U字の梨のかなたより、／革の手袋はづしつづ、しづにおくびし歩みくる。の一詩であります。

「造園学のテキスト」については、賢治が盛岡高等農林学校在学中に、テキスト版として同類ものが存在しているので、造園学の一冊もあって、賢治も使用していたと推測されます。

作品を要約してみると、「造園学のテキストに、自分の写真や原図をいくらあてはめて著者ぶつてみても、自分にはとてもそんな著書は作れなかったし、所詮、はかない夢でしかなかったのではないか。

とにかく自分の造園学の著者であるかのような気分でしたが、ふと思うに今日も、学校の果樹園で梨の剪定などをして汗をかき、霞がかった夕陽を背に、U字型の枝径を、あくびしながらのっそり校舎に戻るのが自分の現実だ、／、ほどの自分をカリカチュア(戯画化)した、いかにも賢治らしいユーモアが面白いです。

だが、なぜこのような詩が生まれたかの根拠には、一考を要します。それには、大正十年十二月以降、賢治が農学校(現・岩手県立花巻農学校)に就職して、どうであったかの自己回想が潜在していると思われれます。面白い実景があ

ります。

余りにも変ったオンリーワン（独自の）な授業をするので、腕白盛りの生徒たちからは、総好さんの反発をくらい職員室でも煙たがられたりで、さすがの賢治も自棄になったり悩んだりの頃のことです。

いろいろ秘策をこらし、見事に賢治は生徒・職員から親しまれ信頼されることになりましたが、その成功例の一つに、花壇作りの一件があります。

それは、学校敷地内や周辺、果ては街角のあちこちに、人知れず黙々と種を播き、球根などを植えておき、知らぬ間にそれが一斉に咲きだして人々を驚かせた、賢治の仕組んだ悪戯でした。

貧しい東北の田舎町でのこと、見たこともない珍しい、美しい花々が次々と咲きだして、花の満開のようにパツと大評判となったのも当然です。

しかもその幻術の仕掛け人が、賢治だと判明するや、忽ち人気上昇。ついに学校でも誰からも親しまれる賢治先生と変身したのでした。

以来、賢治の実景としては、町

の花づくり愛好者も生まれ、その交わり指導のほか、病院入院患者たちへの心の癒しのためと、病院の中庭には、想いをこらしたモダンアートな花壇作りなどへと開花していきました。

さらには、花巻温泉会社の園芸主任となった教え子に請われて、親身も及ばぬ面倒を見てやっておられます。etc.

だが、好事摩多しと言うべきか、羅須地人協会を拠点として展開された賢治の実景には、健康問題や諸事情もあつて加速度的に逼塞してゆき、昭和三年八月の大患をもつて、精神的にも決定的な挫折に至つたのであります。本多式造園学の残映もその時点で終息しております。それへの検証は一層の詳細を必要とされます。

そうした認識をもつて再び新資料発見という、本多学説を抜き書きしているメモが、どんな時とか、どんな必要があつて抜き書きされたかの時点が問われてきます。その時期は、容易に断定できることではありません。だが、賢治にとつて「石灰」が、最も重要な意味をもつてのしかかり、それに直面していたか、その時期や実景に秘め

られているという証しは確かと断定はできません。

それで言えば、羅須地人協会時代の農民たちに稲作指導をした肥料設計書や花壇作りや指導にも、「石灰」という語は、絶えずついでまわってきた常用語であります。

だが、本多博士の学説の要点を抜き書きしているという特別行為のメモは、昭和五年四月以降、岩手県磐井郡長坂村（現・岩手県一関市東山町）における、東北砕石工場の技師をしていたころの手帳に書かれていたものであります。

東北タンカルと呼ばれていた工場主の鈴木東蔵の訪問・要請に応じた賢治は、営農における土壌改良には絶対必要な、石灰肥料の製造・品質改良・普及・販路拡張という激務に、寝食を忘れて東奔西走していた時期のものとなります。

ついに昭和六年九月廿日、上京中の東京神田の宿で倒れ、遺書を書きまでの重体に陥りました。

営農や造林における「石灰」使用は、本多博士が重んじた学問世界では、常に常識・定説化されているのに対して、ごく一般農業の現実においては、「石灰肥料」などを使用する習慣は全くない、昔

からの非科学的な迷信農業でしかありませんでした。

「石灰肥料」の普及・その正しい使用への啓蒙は、賢治以後の農村・農民問題として、戦後今日に至るまで、レベルを向上させる営農に特に重んじられております。

「本多静六博士」とフルネームで書き出されている賢治の抜き書きメモは、以上のような実景のまっただ中で、記されていたものかも知れません。

その筆跡からは、本多博士の石灰論を標とする、賢治の真剣な緊迫感が感得されます。

小康を得て花巻の自宅で療養する賢治は、病床にあつても、しきり工場主の鈴木東蔵宛に、業務推進の新たな提案まで含めた連絡書簡を送りつづけてもおります。

その一方では、賢治の生涯を作品化した《文語詩》を書き上げる死力を尽くす営為に命を削りながら、昭和八年九月二十一日の死までに、「文語詩稿 五十篇」・「文語詩稿 一百篇」・「文語詩未定稿」を書き遺したのでした。

ここに注目した「文語詩著者」は、死の一ヶ月前辺りに完成された、「文語詩稿 五十篇」中の一

詩であります。

この作品は、下書きでは表題は「著書」でありました。その変更は《テキスト》そのものよりも、造園に熱中し愛用したテキストの著者、特定された人物への憧憬が秘められているとも解されます。

賢治の中から気づかされたことは、その人間像が本多博士に思われ、何かその素晴らしい奇抜さには、感嘆するばかりでした。

無駄な既成概念を無視した人間観・自然観・人生観・学問観・社会観の^①における、時代を先取りしたオンリーワンな先駆者として、本多博士と賢治は、人物像として、他に類を見ない学者と詩人ながら全くの相似形であります。

埼玉の大地その一地方に限っても、本多博士と賢治の足跡は、すっかり重なる美しい風景として現存しております。

それは、大正五年九月二日から七日にかけて行われた、盛岡高等農林学校恒例の長瀨・秩父・三峰地方での土壌地質調査行に参加した賢治にとって、それは実に愉しく有意義な旅でした。

賢治のその旅は、関豊太郎教授に統導された学生二十三名とともに、熊谷の宿を出発し、寄居・長瀨・秩父・小鹿野とたどるコースであります。昨年その道をたどり驚いたことは、本多博士が造林した山、またその奥から、採掘された石灰岩を搬出するトラックが、頻繁に往来していることでした。

そしてまた、同時に感銘したことは、賢治がその旅情を詠んだ短歌が九首ほどありますが、その関わりを持つ山間の町々には、決まってそれぞれの短歌碑が、地元の人々によって立派に建立されていることでした。

そうした原風景を訪れたりしたことで痛感した念願を、最後に申し上げておきたいと思えます。

それは、新装なった立派な久喜市立「本多静六記念館」からの学びや、賢治が技師をしていた旧東北石碎工場遺構（現在国指定の重要文化財）の、岩手県一関市立「石と賢治のミュージアム」からの学びを深めて、本多博士や賢治の顕彰・研究成果を交流して、それぞれ郷土発展に生かしたいと思っていることでもあります。

追記・賢治が抜書きした本多博士の石灰論の出典は、その原本が

平成二十五年一月に、岩手大学図書館から新資料として発見されました。

その概略は、県紙の埼玉新聞により報じられ、また拙著『宮沢賢治の心といそしみ』（平成二十五年九月二十一日コールサククス社刊）でも考察発表することができました。

それに加え、また新たな切り口でその問題をここで補足することができましたが、これひとえに本多静六博士を顕彰する会よりのご高配の賜物であります。深く感謝致す次第です。

◆◆◆◆◆
**博士没六十年を記念して
 「本多静六記念館」を整備**

久喜市教育委員会

文化財保護課 松村憲治

久喜市では、本多静六博士の没六十年を記念して、菖蒲総合支所五階に「本多静六記念館」を整備、平成二十五年四月二十一日にオープンしました。同記念館はこれまでの「本多静六記念室」を拡充したもので、広さは約二百平方メートル、展示資料は約三百点に及びます。施設の特徴は「観て楽しめる」

をモットーに、写真やポスターを多用するとともに模型やDVD、パソコンを用いた情報検索機器などを配備しました。また、車椅子利用の方にも見学しやすいようバリアフリーにも配慮しました。

土曜日、祝日及び年末年始以外の各日午前九時から午後五時まで開館しています。見学は無料ですが、団体等の見学で案内を希望される場合は事前の申し込みをお願いしています。

改めて記念館の見所をご紹介します。と次のようになります。

■**森のイメージを再現**

記念館に一步入ると「木のおいがする」とよくいわれます。これは県産材のスギ材が多く使われていること、木製のベンチや椅子



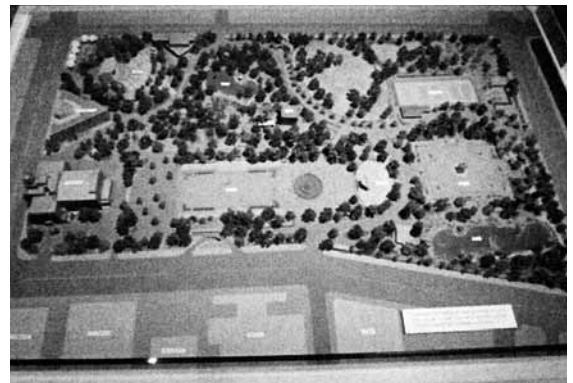
記念館内部の全景

が備えられていることによりま
す。それと何よりも記念館のコン
セプトである「森」をイメージし
ていることにもよります。その一
つが本多博士の代表的な業績の一
つともいえる明治神宮の森を記念
館に再現したことです。記念館の
壁面上部には神苑しんえんの代表的な樹木
であるクスノキ・アラカシ・スタ
ジイ及びシラカシをデザインした
壁紙が貼られています。さらにテ
レビの待機画面では実際の森の様
子とそこに生息する野鳥のさえず
りを常時流しています。

展示ケースに目を転じると、学
生時代の自筆の教科書やノート、
手紙など貴重な資料が目にとまり
ます。中でも東京山林学校時代に
落第点をとり、それをきっかけに
猛勉強に励むようになったという
逸話を残す「幾何学」と「代数学」
のノートは興味深いものです。

■日比谷公園を模型で紹介

「日本の公園の父」とも称され
る博士の代表作である日比谷公園
の現在の様子を四百分の一の大き
さで現しました。側には当初の設
計図面があり、現在の様子と比較
することができます。また、館内



日比谷公園の模型(1/400)

の床面には「日本一」「埼玉県一」
「市内一」の大きな断面図が表現
されています。これは大正二年
(一九一三)に博士が作成した「大
日本老樹番附」をヒントに取り入
れたもので、唯一「横綱」に位し
た日本一の「蒲生かもう(鹿児島県始良
市)の大クス」の幹周は二十四メー
トルもあり、その大きさを体感す
ることができます。

館内中央には「日本の公園の父」
をテーマに、本多博士が設計を手
がけた公園や地域振興策を提言し
た観光地名などを日本地図と写真
を使って紹介しています。また展
示ケースの中には設計書や関係資
料が展示されています。



博士が設計を手がけた公園の写真や配置図等

■博士愛用の「詰襟服」を復元

「本多の詰襟つめえりか、詰襟の本多か」
といわれたほど詰襟を愛した博士
をしのび、残された資料を基に忠
実に復元しました。ドイツ留学の
際に持ち帰った詰襟服が愛用の始
まりといわれていますが、何事に
も合理的であった博士らしく、深
く大きなポケットに特徴が表れ
ています。詰襟服の脇には海外視
察の際には必ず持参したであろう
愛用のシルクハットと双眼鏡が並
んでいます。

この他、図書コーナーには博士
の著作が初版本から平成二十五年
に復刻された最新版まで数多く展
示されています。情報コーナーで
はパソコンを使って本多博士が設



詰襟服(複製)

■開館八か月で一人を超え

平成二十五年十二月三日、記念
館は来場者一人を突破しまし
た。一人目となったのは地元
菖蒲町しょうぶちょう新堀にお住まいのお子さ
ん連れの女性でした。

平成二十五年は鉄道防雪林創設
百二十周年ということで九月には
東日本鉄道文化財団主催によるシ
ンポジウムが鉄道博物館で、ま
た十一月には熊谷市において第
三十七回全国育樹祭が行われ、メ
インテーマアトラクションとして
本多博士の事績が俳優の市村正親
さんらによって紹介されました。
久喜市では、これからも本多静
六記念館を拠点に顕彰する会の皆
様のご協力を頂きながら顕彰事業
に努めてまいります。

日比谷公園百十周年記念事業 と講演会に参加して

本多静六博士を顕彰する会

蓮実誠一

二〇一三年六月一日(土)・二日(日)、日比谷公園百十周年記念「歴史を振り返り、未来を作る」イベントが東京都立日比谷公園で実施され、記念事業に久喜市と本多静六博士を顕彰する会の共催で、「にれのき広場」の一角に本多静六コーナーが開設されました。

「百十周年を迎える日比谷公園」かつてこの場所は幕末までは松平肥前守などの大名屋敷他、明治時代に入ると陸軍の練兵場でした。その後、東京市区改正設計に基づき、ドイツ留学から帰国した本多静六博士が、公園の設計案をまとめ、整備したのが日本初の「洋風近代式公園」日比谷公園のはじまりです。本多博士の設計案に見られるS字型の大園路、わが国初の野外音楽堂として明治三十八年(一九〇五)に初演した小音楽堂(現在の建物は三代目)、第一花壇のデザインなどからは、開園当時の洋風文化普及への意気込みが感じられます。明治三十六年

(一九〇三) 六月一日の仮開園式から数え、今年で百十周年。モダンガール、モダンボーイが闊歩した時代に思いを馳せ、さまざまな記念事業を開催します。「季節の花が色鮮やかに咲く、日比谷公園をお楽しみください。」のパンフレットを読みながら記念館を訪ねました。『公園パンフレットから一部引用』



本多静六コーナーにおいて説明する田中久喜市長

開設を聞いた父親の代わりに来館した女性から「父は近所に住んでいた博士と親交があり、その人柄を懐かしがっていましたので。」「展示パネルとパンフレットの内容を報告します。」と博士没六十年後の貴重なお話をしました。

また、午後の講演会・日比谷公

園を語る。講師：進士五十八さん(造園学者・農学者)、会場：緑と水の市民カレッジで拝聴しました。

用』

講師が触れた本多博士の一部を紹介しようと、数々の設計案の果てに登場した本多静六に出会った日比谷公園はハッピーで、洋式といわれていますが、和魂洋才の精神があり、大園路の形は雲形定規で引いた大胆な西洋式に見えるが、細部の園路や樹林の作り方はナチュラルで、藤棚やつつじ山、梅林など「和」の要素が違和感なく組み込まれ、西洋式噴水なのに「鶴」が羽を広げている。かつての江戸城の石垣の一部を残し、溶岩(火山岩)を多数使用した。平坦な公園で、高見から俯瞰する楽しみを演出することを忘れず、これは、公園造成の中で文化財保存に配慮したものです。出入口は有楽門、霞門、内幸門と名づけ、夜も開放した市民を信頼した案だった。このとき、博士は三十前半の若さ、自分だけの手柄にはせず、チームワークでの仕事、「大きな仕事を成すには手柄は他人に与えることが肝要」とのことでした。『緑と水のひろば69から一部引

そして、講師と松本楼、小坂さんとのトークでは、博士が移植した「首かけイチョウ」は先の戦争中に、高射砲のために先端を切り落とされました。松本楼が、昭和四十六年に放火により炎上(以前にも何回か火災に遭う)、後の安保闘争の舞台になったのも日比谷公園だった。何度か窮地に見舞われた松本楼は、関係した人々に、その都度激励されて再建されました。毎年九月二十五日の「十円カレ」は、このことに感謝し、昭和四十八年から続けています。「首かけイチョウ」と「松本楼」は日比谷公園の歴史を、以後も見続けていくと思うと語り合いました。このように、日比谷公園の底流には、おもしろいと癒しがあり、こうした人間性あふれる明治の人々の存在があったことを知っておき、自らの歴史が刻まれた場所でも、本多静六と出会った幸せな公園である。と結びました。

本多静六博士が関係した日比谷公園は、人々の生活と公園文化の歴史を作っていくのでは。博士の功績に思いをよせ散策し、記念館に戻りました。

日比谷公園を訪ねて

久喜市 島田俊雄

九月十九日、八時三十分、菖蒲総合支所からの人達と合流し、一行三十二名は、久喜市役所を出発し、日比谷公園に向かいました。秋晴れの中、私は妻と参加しました。

公園では、サービスマンから本多静六博士と公園の関わりについての話を伺い、園内の主な施設の案内をして頂きました。

心字池は、本多博士が江戸時代の日比谷見附の石垣や外濠を生かして設計したのですが、現代においても良くマッチしてありました。

有名な「首賭けイチョウ」は、想像以上に幹廻りが太く、大きく、それに、ただ大きいだけでなく、品の良い形をしていました。本多博士の魂があるのだと感じました。



公園管理係長から説明を受ける参加者

した。

昼食は、カレーで有名な松本楼でハイカラカレーを頂きました。食べながら目の前の「首賭けイチョウ」移植の往時を思ったりしたものでした。

本多博士と言えば、私の父が生前、よく口にしていました。「菖蒲町出身で偉い先生がいた。日比谷公園や大宮公園を造った人で、日本最初の『林学博士』であり、それと同時に「四分の一天引預金」を考案・実践し、無駄を省いた節約貯蓄により、多額の財産を築いた資産家である。そして、大学教授を定年退職した後、これらの財産のほとんどを公共の事業に寄付し、自らは質素な生活を続けた人である」と聞かされました。

しかし、当時の私は、よく理解できませんでした。久喜市高齢者大学での授業や菖蒲町にある「本多静六記念館」を訪れることなどして、改めて博士の偉大さを理解することができました。

公園内のみどりのiプラザでは、折り良く「本多静六展」が開催中で、博士の功績により良く触れることができ、実り多い「ゆかりの地訪問」となりました。

本多静六博士ゆかりの地 明治神宮の森を訪ねて

久喜市 石崎 正

明治神宮は、大都会の真ん中で交通の便も非常に良く、初詣日本一であります。

苑内は、玉砂利が敷かれており、歩くと「ザクザク」と音がして、歩くたびに私達に、心地良い刺激で、心を鎮めてくれます。

まさに深層な別天地であります。明治神宮の杜の特色に触れてみたいと思います。

「天然更新」

ドイツ山林学校で学んだ技法で、自然の力で跡継ぎを造り、最終的に自然林となり、「永遠の森」を計画したものです。樹木は、全国各地からの献木と青年団による勤労奉仕だったことを忘れることはできません。

「清掃の決まりは」

清掃について博士からの「聖典」がありました。「集めた落ち葉は全て苑内に戻し、一枚たりとも苑外に持ち出してはならぬ」ことが現在まで守られています。

「清正の井」



清正の井

多静六博士を顕彰する会」の皆様が御礼申し上げます。

神宮内に加藤清正が自ら掘ったとされる井戸があります。テレビ番組で手相芸人が、取り上げ、「御利益」を力説し、パワースポットとして注目されています。実際に水はきれいで、冷たく、今日まで枯れることなく湧き出ているのです。

「日本一の大鳥居」

桧で造られた大鳥居で、手触りも良く、どっしりと杜の中にたたくみ、威厳のあるものです。

「明治神宮の杜」は、私達に心のオアシスとして、六月には花菖蒲、十一月下旬には紅葉として目を楽しませてくれます。一年中祭事がたくさんあり、結婚式、七五三等色々な姿を見せて、多くの方が訪れています。何度訪れても姿を変えて、私達を楽しませてくれます。

この明治神宮の杜を造ってくれた、本多静六博士に感謝し、業績に触れる機会を与えてくれた「本

役員研修

本多静六博士 ゆかりの地訪問

本多静六博士を顕彰する会

荒井康史

平成二十五年十月二十九日、埼玉県のゆかりの地、川越市の伊佐沼公園、越生町上谷の大クス、飯能市天覧山（飯能遊覧地）を、十三名が参加し、次のとおり研修を行いました。

①伊佐沼公園

本多静六博士は、川越市の依頼により「文化生活と川越市の都市計画」と題する講演を行いました。この中で、伊佐沼の公園整備について提言をしています。伊佐沼は、自然が豊かで、さらに交通の便が良く、観光地として最適でしたので、本多静六博士は提言の中で、沼の土砂をさらう浚渫、道路の整備、桜並木の植栽、釣り場、飲食店の整備などを具体的に示し、公園としての整備を促しました。現在、伊佐沼は、貴重な野鳥や動物の宝庫として知られています。沼の西側には、市立伊佐沼公園があり、市民はもとより、広く県民の憩いの場として親しまれています。本多静六博士が関わった期間は、大正十五年からと言われています。

ます。われわれ一行は、二十分程散策し、次の目的地越生町の上谷の大クスへと向かいました。

②上谷の大クス

上谷の山入集落に根を張る大クスは、幹回り十五メートル、高さ三十メートル、樹齢一〇〇年以上とも言われる巨木です。昭和六十三年度「緑の国勢調査」で全国巨木ランキング十六位、埼玉県で一位に認定され、県の天然記念物に指定されています。本多静六博士は、大正二年、自らの調査結果を基に「大日本老樹名木誌」を著し、さらにこれを基に老樹名木の保護啓発を目的とした「大日本老樹番付」を作成しました。この番付表の中で、上谷の大クスは、東方（広葉樹の部）で前頭三枚目に位置づけられております。ちなみに全国第一位は、鹿児島県始良市にある蒲生のクスの木です。蒲生のクスの木は、幹回り二十四メートル、高さ三十メートル、推定樹齢一五〇〇年といわれ、四季を通して緑を絶やさず威風堂々の雄姿でたたくむ蒲生八幡神社の日本一の大クスです。バスは、最終の視察地飯能市の遊覧地へ向かいました。

③飯能遊覧地

天覧山は、もともと愛宕山と呼ばれていましたが、明治十六年明治天皇が、この山頂から近衛兵の演習を統監したことから、天覧山と呼ばれるようになりました。標高一九七メートルと低いものの、頂上から眺望は良く、飯能市街が一望できます。本多静六博士が、飯能遊覧地設計を著したのは、明治三十八年頃のことでした。当時、既に武蔵野鉄道（現西武鉄道）の開通が決まっていたことから、天覧山を中心とした遊覧地（公園）の設計を鉄道会社等から依頼されたものと思われまます。鉄道が開通した大正四年以降、この設計をもとに登山道、池、橋、売店などの整備が始まったといわれております。現在、飯能駅から天覧山までの道沿いにある桜の多くは、天覧山遊覧地設計を作った際に、植えられたものと言われております。天覧山の散策中、小雨が降り始め、下り坂は少し足場が滑るところがあり、全員慎重に下りて来ました。バスに乗る前、全員にて天覧山の南麓にある能仁寺を見学。日本名園一〇〇選にも選ばれている美しい庭園は、四季折々の花で彩ら

ます。この名園が、本堂北庭にある「池泉鑑賞式蓬莱庭園」です。この庭園は、桃山時代（一五七三〜一六一五）の造園と推定されておりまます。



天覧山前にて

今日一日の研修も終わり、一〇〇年先を見、考え、設計した本多静六博士の偉大さを改めて考えさせられた一日でした。幸い菖蒲総合支所庁舎五階に本多静六記念館も開設され、ボランティア活動も行っておりますが、この研修を契機に再度博士の偉業を広く啓発していかなくてはという気持ちになりました。

（本多静六博士の森だより）
森の便りその三コナラ、クヌギ

本多静六博士を顕彰する会

小山千秋

コナラ

「森のものどもも元気に六年生になりました。一、二年の頃は草に被われたり、台風あらしにぶつ倒されたり、寒風にいえ（こごえ）たり、死にもの狂いでした。草刈り、草取り、支柱立て、暴風ネット張りや土壌改良（落葉や糞入れ）、消毒まで入念な介護のお陰でこの通りデカガス（一番大きい楠）に追いつきました。」

クヌギ

「三年前から小鳥が巣を作り、昆虫や虫も、地中の生き物たちも年々増えてきました。外来種や蔓性、背高い草は駆除してもらい、楽しい森づくりの準備が整いつつあります。」

コナラ

「ここで自己紹介をします。僕はブナ科のコナラ属コナラで、そちらがブナ科コナラ属のクヌギです。」

よく似ていて間違われますが、僕は葉に丸みがあり、実は砲弾形で、クヌギは葉が細長く実は団子形です。」

ドングリコロコロでお池にはまったのはこの子ですよ。」

※ここで二人のつぶやきを聞いてみましょう。会話は静六が子供の頃の河原井弁を再現してみました。

クヌギ

「クヌギつてな役立たねえトーヘンボクなんだって。」

コナラ

「そんなことねえど、年がら年中働いて稼いでいるんだから。」

クヌギ

「んだなあ子供が十位になると切つて炭に焼いて売つちやんだんべえ。すつと（すると）切り口に新芽がゾロゾロ出るし七、八年たつと、デッケイ（でかい）順に切つて、又焼いちまんだから暇がねえよなあ。」

クヌギ

※林業生産では、この方法を萌芽更新法と言つて最も換金が早く（現金収入）土地生産性が最高と評価されています。」

クヌギ

「んん、まんざらでもねえやなあ。んぢや家あ、金はあるだべなあ。もう少し小使こづかいくれたつて良んだいなあ。」

コナラ

「でもさ、今年や馬鹿暑あちいと思つたら、急に寒くなりやがつて取込み（同化物質の貯蔵）が間に

あねべえ。そのかり（代わり）紅葉がよかんべよ。」

クヌギ

「それよりもなあ、おれつまんねえのは、冬眠だよ。他よそん家ぢや葉っぱが落つこちれば、後の半年や寝て暮らすんだべ。俺おれらん家や、葉っぱが枯れても枝にしがみついて来こ四月まで芽を守んなくつちやなんねんだんべ。」

コナラ

「先祖からやつてきたんだから仕様がねえべなあ。苦あれば楽あるつて言うがな。」

クヌギ

「博士と同じだなあ。※今森では九種五百の仲間たちが背伸びの競争中、中でも急成長して頭一つ抜け出したのが、コナラ、クヌギで、表のようにラシクされていますが、来年が楽しみです。」

コナラ

「俺の後に、知らねえ奴がいるんだ。ブナ科にや違ねえようだがなあ。」

コナラ

「俺の後に、知らねえ奴がいるんだ。ブナ科にや違ねえようだがなあ。」

コナラ

「俺の後に、知らねえ奴がいるんだ。ブナ科にや違ねえようだがなあ。」

コナラ

「俺の後に、知らねえ奴がいるんだ。ブナ科にや違ねえようだがなあ。」

コナラ

高さ	樹木名
六米	クヌギ コナラ
五米	シラカシ シノキ ヒミズキ
四米	クスノキ エゴ
三米	ガマズミ
二十五年十一月現在	

「聞いてみんべよ。」

クヌギ

※これはブナ科ヨーロッパナラ、通称オークと言います。十年前ゆかりの地訪問の時、ターラント山林学校の演習林で採種して蒔いたものです。日本の気候に馴染めないで苦勞しているようです。」

コナラ

「おらち（俺）コナラ。こちらがクヌギ、それからよろしく。」

コナラ

「よろしくお願いします。」

クヌギ

※森の木は、窮屈になり、間伐、技打ちの時期になりました。二十年三十年後を見通した計画を立て、実施したいと考えております。」

（注）

※印は人間の言葉
方言は当時の河原井の人の言葉

付記

会長小山千秋氏には、平成二十六年一月二十九日逝去されました。この「森のたより」も今回の（その三）が遺稿となつてしまいました。誠に残念でなりません。

謹んでご冥福をお祈り致します。
本多静六博士を顕彰する会

副会長 柴崎 一

一

第三十七回 全国育樹祭盛大に開催される

本多静六博士を顕彰する会

柴崎 一

『育てよう、みどりは未来のたからもの』。この大会テーマのもと、彩の国くまがやドーム(熊谷市)を会場に、去る平成二十五年十一月十七日(日)皇太子殿下をお迎えして、全国から関係者約五七〇〇人の参加のもと、盛大に開催されました。本多静六博士を顕彰する会からも六名の参加を得て、大会に協力させていただきました。

今回の大会は、主催が公益社団法人国土緑化推進機構並びに埼玉県ということもあって、緑の大切さを十二分に県民にアピールしたことを思っています。

特に本県は、明治から昭和にかけて、全国的に活躍した日本最初の林学博士であり、日本の公園の父とも呼ばれた本多静六博士の出身地(久喜市菖蒲町河原井)であり、大宮公園、川越の伊佐沼公園、飯能の天覧山などの設計に携わり、人々に身近な憩いの場を提供したことなどを含め、今回の育樹祭は、県民にとって、またとない緑の大切さ、樹木の有難さを感じとっていただいた記念すべき大会であったと思います。

式典は、開会のことばに始まり

三旗掲揚、国歌斉唱、主催者あいさつ、歓迎のことば、続いて皇太子殿下のおことばを頂いた後に、緑化功労者の表彰として、

○全国緑の少年団活動発表大会入賞団体

○全国育樹活動コンクール入賞者

○ふれあいの森林作り(優良市町村等)

○埼玉県緑化等功労者

以下の関係団体及び関係者の表彰が行われ、次に緑の贈呈として、農林水産大臣より緑の少年団に苗木等が贈られ、次いで嵐山モウモウ緑の少年団による活動の様子が発表され感動を呼びました。

続いてメインテーマアトラクションとして、川越市出身の俳優市村正親さん、秩父市出身の歌手藺田真木子さん、熊谷市出身の歌手原田勇雅さん、川口出身の子役永田優衣さんをはじめ、三名の男性俳優の人達に加え、本多静六博士の母校である三箇小学校緑の少年団、皆野町の国神小学校緑の少年団および会場地熊谷市の大幡小学校、妻沼小学校の皆さんの協力のもと、日比谷公園の首かけイチョウのモニュメントを背景として「日本の森林(もり)を育てた人」が上演されました。この森林を育てた人とは、日本の公園の父本多静六博士のことであり、改めて博士の偉大さに深い感銘を受けました。



「緑の少年団」の合唱の一幕

展示され、本多静六記念館とともに見学することができます。

次に、第三十七回大会の大会宣言として、国土の保全をはじめ多面的機能を有する森林に理解を深め、社会全体で森林を守り育てていくことが、私たちに課せられた大きな使命であるとしてまとめられ、次回(第三十八回)大会を山形県の「遊学の森」(金山町)をメイン会場として、平成二十六年秋に開催されることが伝えられ、盛会裏に閉会しました。

編集後記

遠山先生には、巻頭の論文を前号に続き執筆していただき、ありがとうございます。先生は、昨年「松林が命を守る」(第三文明社刊)を出版なさいました。三・一一東日本大震災の巨大津波に無残にも飲み込まれてしまった高田松原。その復旧を願って書き下ろした一書となっております。大震災を風化させないためにも、是非ご一読いただけたらと思います。

二十年に一度の式年遷宮で話題となった伊勢神宮、正式名称は地名をつけない「神宮」というようですが、本多博士の専門の造林学が神社の森づくりにも生かされていることがわかります。明治四十年頃に「伊勢神宮城内山林及び神苑に関する意見」を著しているのです。これらの経験と実績が、後年の明治神宮の森づくりへとつながっていったのです。

【編集発行】本多静六博士を顕彰する会

《窓口》

- 久喜市役所企画政策課
〒346-8501 埼玉県久喜市下早見85-3
電話 0480-22-1111(代)
- 久喜市菖蒲総合支所総務管理課
〒346-0192 埼玉県久喜市菖蒲町新堀38
電話 0480-85-1111(代)

会員を募集しています

本多静六博士を顕彰する会では、会の活動をさらに充実させるため、一緒に活動していただく会員の方を広く募集しています。また、当会の趣旨にご賛同いただける団体会員の皆さんも募集しています。

- 入会受付…随時
- 年会費…個人会員1,000円
 団体会員5,000円
- 問合せ…本多静六博士を顕彰する会窓口